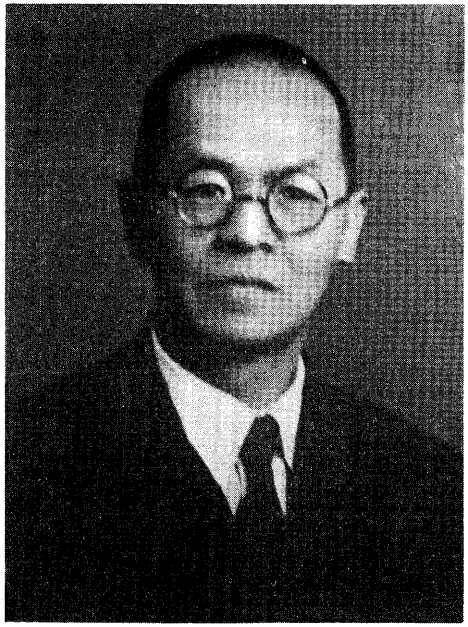
num はタイプ標本を検討したところ *Rhodiola Smithii* であることが判った。

(11) 日本でも稀に栽培されている樺太北部に産するタカスソウ (*Sedum Takasui* Kudo)は，Komarov 編のソ連邦植物誌(Borissova 1939)，最近出版された樺太・千島列島維管束植物検索誌(Vorobiev *et al.* 1974)には出ていない。タカスソウは基部が狭ばまる離生心皮子房をもち，花弁は完全に離生し，花は散房花序に配列するので明らかにベンケイソウ属 (*Hylotelephium*) に分類される。同じく樺太にも産する *H. cyaneum* (Rud.) H. Ohba によく似ている。しかしタカスソウはベンケイソウ属の中では最もよく発達した花茎葉からなるロゼットをつくるほかに，*H. cyaneum* とはがく片が鈍頭，雄蕊は花弁よりも短かいなどの違いがあることが判った。そこでベンケイソウ属の独立種とし，必要となる学名の新組合せを行った。

○蘚類研究家，笹岡久彦さんの思い出 (小林義雄) Yosio KOBAYASI: Hisahiko SASAOKA, a bryologist.

笹岡さんといつ初対面したか，忘れて仕舞ったが，私が東京文理大に在職中の昭和10年ごろ，私の研究室に数回尋ねて来られたことがあった。それは私が勧めた蘚類標本集の1-2輯を製作する相談のためであった。私もその関係で笹岡さん宅を少くとも1回は訪れたことがある。中央線の高円寺駅下車，北方に10分ほど歩いたところに氏の宅があった。一寸した空地に面した小さな平屋で3尺の縁側にかけてお茶を戴いたが，部屋に上ることは遠慮せざるを得なかった。その1端に標本箱があり，その上に書物とノートが2段位に並んでいた。エングレルの植物分科大全の蘚類の部も含まれていた。これらの文献が標本とともに10年ほど後に国立科学博物館に納まり，私自身までも引取られようとは誰が予想出来たであろう。そのころ氏は失礼ながら蘚の研究以外には，うまい世渡りの才覚もなく，と申しても相談を受けた私にも妙案は浮ば



笹 岡 久 彦 氏

ず，結局標本集を製作して特志の人々や，学校，研究機関に購入して貰うことに案がまとまったのである。恐らく30セットほどつくられたことと思う。士族の商法で売れ行きは香ばしくなかった。私の所持していた1セットは科学博物館に納まっている。さて私が笹岡さんに関心を抱いたことには理由があった。そのころ発足したばかりの文理大の植物学教室の分類では，東大の高等植物に対して陰花植物で特色を出そうと努力中であったので，蘚の笹岡さんにも何とか協力したいと思ったのである。結果としては力が及ばなかった。

笹岡さんは富山の出身で，蘚類の研究は岡村周諦先生に就いて初歩を修得し，その仲介によりフィンランドの Brotherus 氏に連絡がつき日本本土，朝鮮，満州，台湾などで採集された標本を送って鑑定を求め，笹岡さんによれば150種以上の新種所命を得たという。このことはB氏が昭和4年に他界するまで続いた。その後は Dixon 氏に依頼したと聞いている。またその記録や地方蘚類目録などは蘚類雑記の表題で植物研究雑誌 2(3) (1919)～8(1933) に7篇ほど発表されている。この他に，例えば日本産蘚類の原記載文集などが散見される。また晩年には野口さんや桜井氏などとも交渉があったようである。雑記の1が出版された大正8年ごろは富山に在って樫廼(カシノヤ)舎の号を名乗って居られたが，その後上京して以来晩年まで迷蘚愚奴(メイセングド)と自称していた。これほどまでに卑屈にならずともと私は思うが，氏の性格の一端が現われているのかも知れない。

氏の肖像としては台湾で撮った採集服に双眼鏡をさげた颯爽たる姿が植物研究雑誌 6(3)：76(1929)に載っているが，ここに掲げる写真が晩年の風貌をよく表現している。

第2次大戦のころは，私は満州に渡り，氏とも交渉は絶えた。恐らく内外の酷しい環境に耐えられず，研究を進めることの不可能を覚ったのであろう。関係資料の全部を武田製薬に引取って貰い，改めて武田さんから科学博物館に寄贈するという型式がとられた。もちろん朝比奈先生の仲介があったのである。その代金は5,000円，標本は約1万点であった。これが氏の全標本と思っていたが，井上氏によると多くの標本が他にも保管されていると云う。これらのコレクションの中に未発表のものも多かったが，その後の多くの学者により整理された。

笹岡さんは標本のすべてを手離した後に郷里の富山に帰り，僧籍にあった関係から，その方面で糊口をしのいでいたと思われたが，間もなく他界されたことを風のたよりに聞いた。

現在蘚苔類の研究に関しては我国は世界の一大拠点となっている。多くの俊秀がそれぞれ立派な地位にあって，すぐれた業績を次々と挙げている。それにつけても僅々30年以前の笹岡さんの身辺はまことに悲惨なものであった。研究史上の開拓者の一人が斯様な経歴をたどったことを忘れないでほしい。　　（国立科学博物館）